

KJQ.PAPER

# 〈心の基礎〉リサーチ

〈心の基礎〉教育を学ぶ会メンバー

会長 菅野 純 綿井雅康 加藤陽子 藤井 靖 桂川泰典 中村 有

第 2 号

2013 August

発行人 〈心の基礎〉教育を学ぶ会 事務局長 萩地一夫

事務局 株式会社実務教育出版 ☎163-8671 東京都新宿区新宿1-1-12 TEL 03-3355-0921 kjq@jitsumu.co.jp

## 子どもの心を伸ばしたい —新しい環境に身を置く力—

『〈心の基礎〉リサーチ』 編集長  
十文字学園女子大学 准教授 加藤陽子

最近、学生と話していく気になることがあります。それは、学生たちの行動範囲がとても狭いことです。大学は埼玉県の南部にあるのですが、「買い物は行つても大宮。新宿や渋谷なんて行かない」「夏休みは、バイトか地元で友達と遊ぶくらいで海外旅行や遠出はしない」「希望就職地は埼玉や東京（しかもこの埼玉や東京には、県境や離島は含まれていない）。小中学生に比べ行動範囲が広いはずの彼らが、なぜこんなにも“新しい環境”に身を置こうとしないのでしょうか。

新しい環境では、これまで考えなくても出来たことや何も言わなくてもわかってもらえたことが通用しなくなり、その都度、熟考し工夫するという手間が必要になります。おそらくそれはとても面倒な作業で、だからこそ学生たちは新しい環境に入ることにためらいを感じるのかもしれません。こうした学生を前に、私は今、子どもたちに新しい環境に積極的に身を置く力を身につけてもらいたいと考えています。というのも、学校臨床の場面で出会う「シミュレーション通りにいかないとすぐにキレる」「回答は立派だが行動が伴わない」といった子どもたちが、目の前の学生の予兆のように思えるからです。

では、新しい環境に積極的に移行する力はどのように身につくのでしょうか。

新しい環境に身を置いたとき、われわれの心には揺らぎが生じます。これを防ぐためには、多少の揺れに〈動じない〉

今号から編集長を拝命いたしました。  
みなさまの心にエネルギーを  
お届けできるようなペーパーを  
作っていければと考えております。  
どうぞよろしくお願ひいたします。



Kato Akiko

力と揺れに応じて柔軟に〈変化する〉力の2つの〈力〉が必要になるでしょう。揺らがない度合いは、これまで得てきた「安心感」や「認められる体験」の多さに左右されます。親子関係、教師・生徒関係、仲間関係の中でたくさんの精神的充足を得ている子どもほど、「僕は大丈夫」「みんなは変わらず私を認めてくれる」という内なる確信をもつことができます。この確信は、安定した自己像を築く土台となり、あらゆる場面で子どもを支える力になるでしょう。他方、環境に合わせて適度に変化するためには、「状況判断力」や「問題解決力」が必要になります。大人はどうしても正答を想定しがちですが、大切なことは、立場によって状況判断は異なり、問題にはたくさんの解決方法があるという臨機応変さを学ぶことです。「Aの場合 B」といった一対の正答を導きだすだけでなく、いくつかの可能性を学ぶこともまた、実生活を生きるために必要なスキルだと思います。

『KJQマトリックス』は、学校場面だけでは見えてこない子どもたち1人ひとりの〈動じない力〉と〈変化する力〉を知ることができる有効な手段です。そして、たとえ子どもの（あるいはクラスの）新たな一面を知ることで、われわれが熟考し工夫する手間を課されたとしても、KJQは1つの指導の指針を示してくれるはずです。ぜひ『KJQマトリックス』を使って、子どもと一緒に新しい環境に積極的に対応できる力を身についていただきたいと思います。

## 課題解決に活用!

# 『KJQマトリックス』～小学校編～

『KJQマトリックス』の開発者である菅野純先生と、スクールカウンセラーとしても活躍されている加藤陽子先生のお2人に、学校カウンセリングやスクールカウンセラーという第三者的な視点から見えてきた“学校の今”と「KJQの可能性」について語っていただきました。第1回目は、“小学校の今”です。

### 「個」の関係を求める、幼さの残る子どもたち

**菅野：**私は学校カウンセリングの講師として、加藤先生はスクールカウンセラーとして、さまざまな学校、先生方、子どもたちと関わっています。今回、学校の現状や課題がテーマですが、私たちは学校の先生という立場ではなく、第三者的な立場であるということを押さえることがまずは大事なのだと思います。つまり、内側から見た現状ではなく、少し距離を置いた外から、第三者的な視点で見た問題について考えていきたいと思います。

今回は小学校の問題を考えていこうと思います。低学年の先生が悩まれる問題の1つが子どもたちの「幼さ」で、基本的な生活習慣が未確立な子が増えていると感じます。



菅野 純

〈心の基礎〉教育を学ぶ会 会長。早稲田大学教授。

また、先生と1対1の関係を求める子も多い。私は「二者関係が卒業していない」と表現するのですが、学校は1対30や40という比率で先生が配置されているにもかかわらず、「1対1で説明を受けたい」「僕だけをかわいがってほしい」子が多いです。学校によって実情はさまざまだと思いますが、先生方は勉強を教える以前の育てる部分、保育的な要素でご苦労されていると思います。

**加藤：**幼さへの対応は現場の先生方のお話の中でもよく出る話題です。幼稚園・保育園の教育は昨今多様化していますが、小学校自体はおそらく私の頃と今とではそう大きな違いはなく、幼・保と小学校の差が広がっている気もします。

**菅野：**確かに、幼・保では英語や体操を導入するなど、教育は多様化していますね。ところが、小学校はあまり多様化しておらず、子どもたちはその辺りで窮屈で単調という体験を得てしまうかもしれません。

**加藤：**子どもが個の関係を求める点ですが、先生方は教員になるとき1対1の関係はあまり習ってこないですね。

**菅野：**そう、教師の教育技術は集団指導が中心です。

**加藤：**ですから、そこをカバーできるようなもの、たとえば集団を見ながら個々を見ていく方法や支援の案があると、低学年の指導に役立つかなと感じます。

小学校には単調でなじめない子もいるとお話しにありました、一方で単調だから落ち着く子もいる。そこのバランスをどうとるかも、低学年の学級経営の難しさを感じます。

**菅野：**子どもの多様性の理解は大事な視点ですね。環境が変わらないことで落ち着く子、変わらないことが退屈に

なってしまう子など多様な子が同時に存在する教室で、1人でどう教えるかに苦労していらっしゃる先生方へのフォローが必要ですね。

もう1つ子どもの幼さの背景に、保護者の社会性の未熟さがあると思います。私は「社会性の問題は子どもと保護者はセットで考える」ように提案しています。「保護者が幼いから指導しなさい」ということでなく、社会性は誰にとってもいつも問題になるものと考えるからです。先生は先生の、私のように60歳を過ぎた人は60歳の社会性を身につけなければならないように。そして、保護者の社会性について学校が発信する必要性も感じています。

**加藤：**子育てを通して、保護者は社会性を身につけていますが、そのときカギになるのが「子どものわからなさにどう付き合うか」だと思います。学校から講演依頼があると「小学校に入ったら子どもがどう変化するか不安だから教えてほしい」「思春期はこういうもんだよという話をしてほしい」と要望をいただくんです。「保護者自身も通ってきたプロセスなのに……」と思うのですが。

**菅野：**わからない部分が増えるのは子離れの過程に当然あることだけれど、今の保護者はそこに不安を抱いてしまうのですね。

**加藤：**不安で揺らぐから、先生に詰め寄ったり、電話したり。考えてみれば、保育園や幼稚園は連絡帳に事細かに書くことが多いですよね。そういう可視化されたものが急に消えるのも、不安につながる要因かもしれません。

従来は、近隣の方や祖父母が担ってきたのかもしれません、わからなさや不安は何となく学んで自然と解消できてきたと思うんです。でも先ほど菅野先生がおっしゃったように、今は学校が対応しないといけない時代。「親はわからないことを不安に感じている」ことに理解を示し、支援することも大切だと感じます。

**菅野：**「秘密をもつ能力」は子どもの成長の証と言われます。内面世界の発達には、1人の時間や親の知らない世界をもつことも重要ですから、保護者にも「秘密にする能力が出てきたよね」と明るく伝えたいですね。

**加藤：**さらに中・高学年では、暴きたい親と暴かれたくない子の対立もクローズアップされてきます。親が何でも



## 加藤陽子

『〈心の基礎〉リサーチ』編集長。十文字学園女子大学准教授。

かんでも暴いてしまうことが、「何でもしゃべってくれないから友達じゃない」とか「ウチらの仲じゃん」といった、何でも暴きたくなる子を生んでいるようにも感じます。

**菅野：**親の子に対する態度が子どもに学習され、子どもの友達関係に対する態度になっていく……そういうふうに連鎖しているのですね。わからないのは不安だけれども、だからといって何でも聞きだそうとするのではなくわからないまままでいる「わからなさへの葛藤能力」のようなものを、大人が身につけることも大切なかもしれません。

### 「個」への対応で、問題解決につなげる

**菅野：**特に男性の先生が悩む高学年の問題が、“女子のわからなさ”です。どんな切り口が考えられるでしょうか。

**加藤：**女子は集団になると荒むけれど、1人ではそうではない場合が多いので、あえてバラして見るようアドバイスしています。たとえば、先生方には「苦手だなと思う子たち、1人ひとりはどんな子ですか」とうかがうんです。まずは「1人ひとりはこうだ」と理解し、そこから対応を考える。集団ではなく1対1で対応していくと、子どもは気にかけてもらっていると思えるようになり、気持ちがほぐれ、荒みの解消につながるように思います。

**菅野：**女の子は男の子に比べて成長、特に言語能力の成長が早く、男の子よりも早い時期に物事の関係性に敏感

になっていきます。また、よそのウチと自分の家庭とか、自分と友達など比較能力も育ってくる。他人との違いに敏感になり、比較能力が生じると「何で私ばかり」という思いを抱く子も増えてきます。私はこれを「不等感」と呼ぶのですが、不等感の根っこには寂しさや悲しさがあるのです。それが先生に転移されやすいのです。ですから、加藤先生のお話のように、個々に丁寧に関わることで荒みが収まるのでしょうか。

でもここで十把一絡げに集団で対応してしまうと、「何で私たちばかり」と不等感が増してしまいます。すると先生は「何だ、自分の問題を棚に上げて」と、子どもとの関係は悪循環になりますよね。

今の子は、我慢する力や頑張る力は結構もつているけれど、「頑張ったから何なのさ」となる場合も多い。高学年ではまだその辺の心情が言語化できないので、似ているけれど実は中身は微妙に違う子たちがグループ化して先生を無視したり、行動に表してしまうんです。だからこそ、1対1に戻してみるのは大事な方法だと

思います。

## 『KJQ マトリックス』で、集団の力を生かす

菅野：もう1つが発達障害の問題で、発達障害の子への指導のほか、“2軍3軍の子”と言われる、発達障害ではないが授業に飽きたり勉強がわからなかつたりして動きたい子が揺れ始める問題、いじめやからかい、保護者の障害理解など、いろいろな問題が見られます。

加藤：小学校では学級経営は担任の先生が中心となるため、発達障害の子や周囲の子、2軍3軍の子への指導を1人でしなければいけないつらさがあると感じます。

また、先生方とお話ししていると、障害名がわかることで安心してしまい、対応に結びつかない現状も見えてきます。先生方は「発達障害の本はたくさんあるしよくわかる。でも『じゃあどうするの』という部分がしつくりこない」という言い方をされるんです。「じゃあどうする」という指



## いじめや不登校などの予防的指導のために

**KJQ**  
マトリックス  
小学校版・中学校版・高校版

ご要望にお応えし、小学校版できました！

編：菅野純グループ 発行：実務教育出版  
対象：小学校5～6年生、中学校1～3年生、高校1～3年生  
実施時間：15分 定価：各500円（採点料・税込）

資料請求・お問い合わせは実務教育出版まで！  
tel：03-3355-1801 <http://jitsumu-kyouzai.com/>

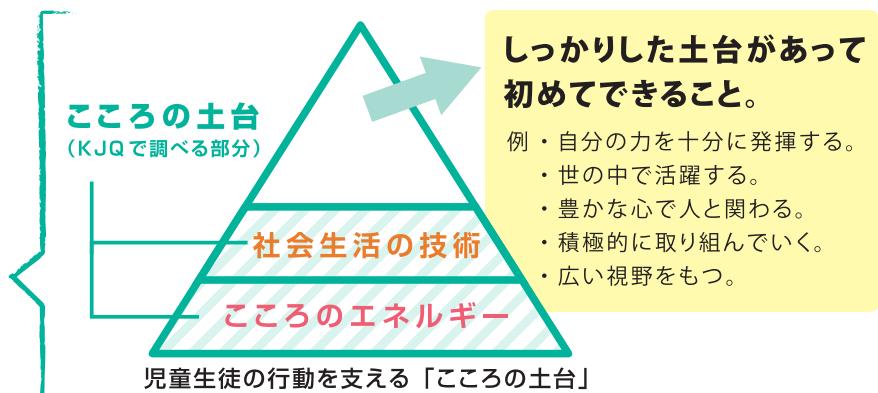
### ■KJQとは

57の質問に答えることによって児童生徒の心の発達状態を調べる心理検査です。

### ■KJQで調べること

#### こころの土台

穏やかな気持ちで人と関わったり意欲的に物事に取り組むために必要な児童生徒の行動を支えている基盤のことで、「こころのエネルギー」と「社会生活の技術」の2つの部分からできています。



針を得るサポートがあると、先生方も腑に落ちるのかなと思います。

**菅野**：昔は「〇〇のときはこんな指導を」「こんな教材使つたら」といった先生同士のピアサポートがあつたかも知れないけれど、今の先生はそれをあまり望まないし、実際になされていない。そうなると結果的に担任が孤立無援化しますよね。

こういう難しい局面でこそ第三者の力は大きいと思います。たとえば自分の身内を介護すると感情が湧き出てうまくできないけれど、他人だからこそうまく関わることもありますよね。これと同様に、担任の先生は直接の当事者だからこみ上げてくる感情や不安、焦りがあってうまく関われない部分もあると思うんです。そこに第三者が介在するシステムがあれば、よく見えるし、機能するのではないか。

**加藤**：第三者の力のほかに、集団の力の活用も重要だと感じています。その子に直接働きかけて変えていくことも大事ですが、周囲を動かすことによってその子を変える可

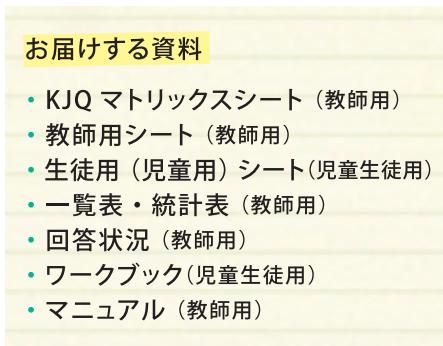
能性も、指導に加味していくとよいと思います。

**菅野**：先ほど「1対1」の指導という話がありましたが、今度は「集団の力を生かす」という視点ですね。

そのためには、まずは児童・生徒の状態とクラスの様子を客観的に知る指標が必要です。その指標の1つが『KJQマトリックス』です。今のクラスの状態を視覚的に、客観的に把握でき、学級経営のたくさんのヒントを得ら

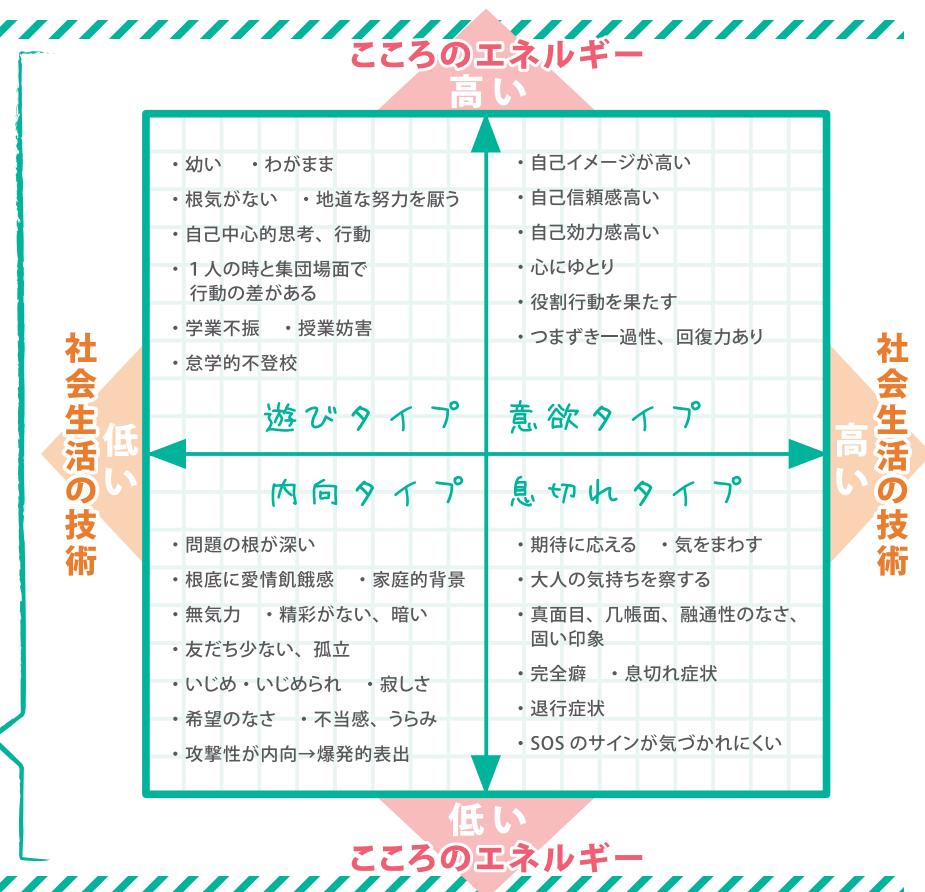
れるでしょう。たとえば、意欲タイプ群にいる子たちにどう働きかけていくか、その働きかけによって内向タイプ群や遊びタイプ群、息切れタイプ群の子たちにどう影響を及ぼしていくかなど、クラスの変容を予測しながら学級経営を行うことも可能になるのです。

これまで見てきたように、今、小学校にはいろいろな難しい課題が山積しています。「個」だけ、あるいは「集団」だけといった一方向的なアプローチではなく、「この時は個、この時は集団」と課題や場面に応じてフレキシブルに転換していくことも、学級経営には大事だと感じますね。



#### マトリックス 4つのタイプ

マトリックスとは、縦軸に「こころのエネルギー」を、横軸に「社会生活の技術」をとった図に児童生徒をプロットしたもので、4つのタイプに分かれます。クラスのマトリックスを見ればクラスがどのような「こころの土台」をもつ児童生徒で構成されているかがわかり、**クラスのようすを踏まえた個別の児童生徒への対応や支援**だけでなく、**クラス全体への働きかけ**を検討する際の有効な資料となります。



## Q1 心理検査に対する疑問と『KJQマトリックス』の実施時期 .....

中学校で教育相談係をしています。「心理検査」というと漠然として使いづらい印象です。『KJQマトリックス』は具体的にどのような使いができるのでしょうか？また、いつ実施すると効果的でしょうか？

A

心理検査の多くは心理学専門の人たちによって作られており、学校現場に即した活用は限定的で、扱いづらい印象を与えていたようです。

『KJQマトリックス』は現職の中學・高校の先生方と心理学の専門家の協力で作られており、学校生活や生徒の状況に沿った質問やワークブックで構成され、生徒たちも取り組みやすくなっています。結果はコンピュータ処理され、個人結果のグラフや学級のマトリックスで、個人や学級集団の傾向を、視覚的にも把握できるようになっています。

実施時期としては、新しいクラスにも慣れて落ち着いた6月前後に実施すると効果的です。生徒自身が自分の力で自分の心の状態を理解するとともに、個人の結果は個人面談で、また、マトリックスは学年職員がクラスごとの様子を把握するのに役立ちます。採点処理に約10日間必要ですからそれを見込んで実施を決定してください。

(相模原市立相武台中学校教諭 原口和博)

### 『KJQ』 Q & A

## 先生の質問にお答えします

『KJQ』に関する質問に  
研究会のメンバーがお答えする  
コーナーです。

質問を募集  
しています

このコーナーで取り上げてほしい  
『KJQ』に関するご質問がございましたら、  
メール（[kjq@jitsumu.co.jp](mailto:kjq@jitsumu.co.jp)）にて  
お知らせください。

## Q2 『KJQマトリックス』の複数回実施 .....

学年の始めと終わりや学期ごとなど、『KJQマトリックス』を1年に複数回実施することについて検討しています。1年間に『KJQマトリックス』を複数回実施することのメリットを教えてください。

A

メリットは、児童生徒の成長や指導の効果を確認することができることです。『KJQマトリックス』の結果資料のうち「教師用シート」では過去の結果の推移が比較できるようになっているので、児童生徒一人ひとりの変化や成長を把握することができます。また過去の「マトリックスシート」の結果と見比べることで、学級全体としての変化や成長を把握することができます。これらの結果から指導の効果を知ることができます。

1年間に複数回『KJQマトリックス』を実施するなら、児童生徒の成長記録をつくることができます。児童生徒はプラスの変身を実感し成長への意欲を増すのではないでしょうか。

(四国学院大学准教授 山口孔丹子)

## 日ごろの理解と異なる結果が出た場合 .....

### Q3

本中学校の新入生の中で模範生となるしっかり者の女子生徒ですが、学級担任が教室で見ている姿と『KJQマトリックス』の結果との差が大きく、学級内で唯一の「息切れタイプ群」でした。「臨床尺度」にも5項目に該当しています。どうしたらよいでしょうか？

\*「臨床尺度」：6つの質問項目がこれに当てはまる。これらの項目に対してある回答をした場合には指導上見過ごすことのできない項目のこと。

A

このように教師の理解と異なる結果を得たときこそ、児童生徒を立体的に理解するチャンスです。異なる結果が出るのは次のような場合です。①学校生活にあらわれる児童生徒の表面的言動の背後に教師の予測外の複雑な家庭背景がある場合、②児童生徒自身の内面的成長の結果、表面的な言動と内面にギャップが生じている場合、③(教師の予想より高い場合)児童生徒の「こうありたい」という願望が『KJQマトリックス』にあらわれている場合、④(教師の予想より低い場合)今の自分の状況をもっと知ってほしいというSOSのサインを発している場合、などです。いずれの場合にも「臨床尺度」や、全質問に対して児童生徒がどのような回答をしたかを一覧表で示した「回答状況」などをさらに丁寧に検討していくことで、指導のヒントが得られるはずです。

(藤枝市立藤枝中学校養護教諭 増田みちよ)

## 『KJQマトリックス』二次元布置図の分析（1）

### — 学級特性検討のための類型化の試み —

綿井 雅康・加藤 陽子

#### 【問題と目的】

『KJQマトリックス』を実施することで、学級単位での二次元布置図を得ることができる。この布置図は、各生徒の結果を精神的充足度の3特性の合計得点（縦軸）と社会的適応力の6特性の合計得点（横軸）からプロットしたグラフである。学級の全生徒の結果を1つのグラフに表すことで、学級集団の特徴が明らかになるとともに、各生徒を学級全体の相対的な位置から理解できる。

しかし、2側面の合計得点から表される二次元布置図は、学級を構成する生徒たちの状態に応じて、さまざまなパターンが出現しうる。学級ごとの布置パターンを読み取ることが学級理解に役立つ一方で、布置パターンの特徴をあらかじめ整理しておくことも有用である。そこで本研究では、二次元布置パターンの類型化をプロットデータの統計的指標から試みた。

#### 【方法】

北陸地方にある公立高校で『KJQマトリックス』を実施した計25学級の回答データを分析対象とした。各学級の人数は34～42人であった。

精神的充足度と社会的適応力の各段階合計点から学級の二次元布置図を作成するとともに、次の統計量を算出した。1) 2つの合計点間の相関係数、2) 単回帰係数（社会的適応力を独立変数、精神的充足度を従属変数と設定）、3) 各合計点の中心（精神：9点、社会：18点）から各生徒の合計点までの距離の平均、4) 合計点の平均、5) 二次元布置図の各象限に存在する回答者の比率。

#### 【結果と考察】

25学級の二次元布置図を共同研究者がプロットの様子から臨床的経験を踏まえて分類した後に、各々の統計量による分類基準を検討した。その結果、①広範囲分布型、②水平分布型、③垂直分布型、④中央凝集型、⑤右上凝集型、⑥左下凝集型、の6つに分類することができた。

①広範囲分布型は右上から左下までの直線回帰に沿ったプロットが多く、かつ両側面ともに高得点の生徒から低得点の生徒まで幅広く分布するものである。この分布がより水平方向に傾いたのが②水平分布型、反対に垂直方向に傾いたのが③垂直分布型である。④中央凝集型とはプロットの範囲が中央付近に集まったものである。同様の分布だがプロットの重心位置によって⑤右上凝集型、

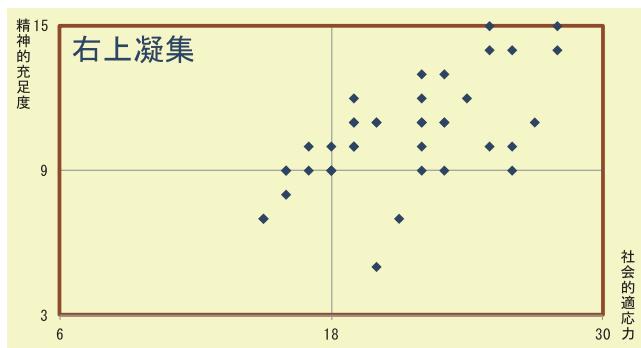
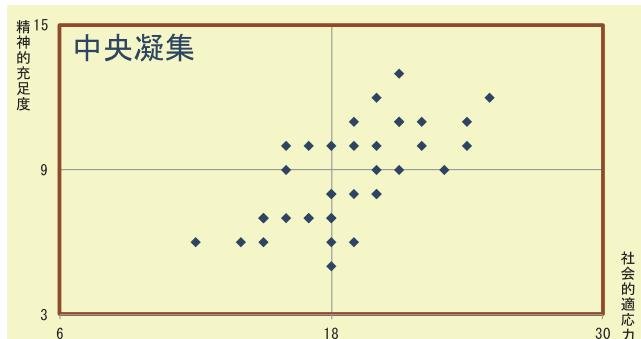
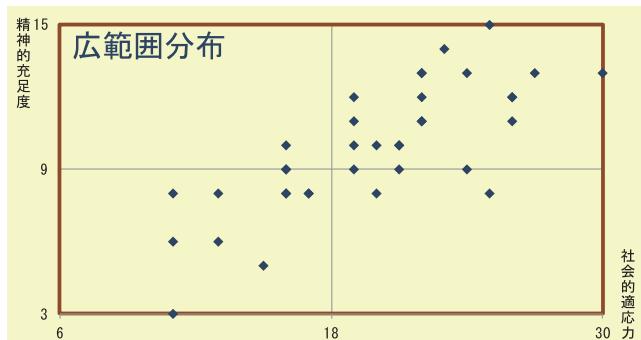
⑥左下凝集型も存在する。各類型の統計量の平均値と分類基準を示したのが表である。

布置図の分類は、相関係数の値から①～③と④～⑥に大別し、回帰係数、距離平均、象限の人数比率から各類型に分類できることが示された。

こうした類型を踏まえて学級の雰囲気や生徒間の力動的関係を把握していくことが必要となる。

表 類型別の統計量の平均値（上段）と分類の基準（下段）

組	N	相関係数	回帰係数	距離平均	社会平均	精神平均	第1比率	第3比率
広範囲分布	5	0.78	0.41	4.56	19.0	9.4	41.3	38.0
		>0.75	—	>4.0	—	—	>33.3	>33.3
水平分布	2	0.78	0.35	3.78	18.9	9.2	38.6	36.1
		>0.75	<0.40	—	—	—	—	—
垂直分布	4	0.81	0.51	3.96	19.1	9.6	43.4	39.4
		>0.75	>0.45	—	—	—	—	—
中央凝集	5	0.63	0.41	3.51	18.7	9.0	32.8	39.0
		<0.75	—	<4.0	18.0～19.5	9.0～9.5	—	—
右上凝集	3	0.58	0.35	4.09	20.6	9.8	51.2	22.3
		<0.75	—	—	>19.5	>9.5	第1 > 第3	—
左下凝集	6	0.68	0.36	4.03	17.7	8.6	25.0	55.5
		<0.75	—	—	<18.0	<9.0	第1 < 第3	—



# BOOK GUIDE

研究会のメンバーが学校の先生や生徒におススメしたい本を紹介するコーナーです。  
今回は菅野 純先生（早稲田大学教授）が紹介します。

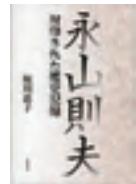


「連続射殺魔」と呼ばれた永山則夫は1968年10月から11月にかけての26日間で4人を拳銃で殺害した。“附属池田小事件”の宅間守は2001年6月、出刃包丁で児童8人を刺殺し、児童13人と教師2人に重軽傷を負わせた。

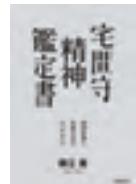
「法律がなかったから流せなかった」と母が語る永山は、憎たらしい夫に何から何までそっくりな子どもだった。小学2年生から始まった家出は数十回。唯一一人自分を可愛がってくれた姉のいる網走に向かってひたすら北へ北へと向かったものだった。

妊娠を喜ぶ父に対して宅間守の母親は「あかんわ、これ、堕ろしたいねん、私」と言ったという（別資料）。幼稚園入園前は、ごつつい石を相手の顔をめがけて投げ怪我させる、線路に置き石をする、小学時代は、同級生の手に小便をかける、子猫を新聞紙で包んで火をつけ溝に放る、授業中自分の性器を女の子に見せる、などの行動。宅間は精神鑑定により「情性欠如」「空想癖」「虚言癖」「人格障害」などとされた。

彼らにとって学校教育は何だったのか？なぜ私たちは永山や宅間のようにはならなかつたのか？などを、本書と対話しながら考えてみてはいかがだろうか。



永山則夫  
封印された鑑定記録  
堀川恵子著 岩波書店  
定価 2,205円  
2013年2月発行



宅間守精神鑑定書  
精神医療と刑事司法のはざまで  
岡江晃著 亜紀書房  
定価 2,520円  
2013年5月発行

## 私のbeing

リレー  
エッセイ  
第2回



「こころのエネルギー」を補給する要素として「楽しい体験」がありますが、その一つとして「目的に何もしない」つまり「being（ただ、いること）」はとても大事です。人は日頃「doing（何かをすること）」から成り立っていますが、それ以外の一見無駄に見える時間も、実は必要なものなのです。このコーナーでは、研究会のメンバーが日頃どのように「何もしないで」こころのエネルギーを注ぎ足しているのか、紹介してもらいます。第2回は、チームKJQでは「軽妙トークと車好き担当」である、中村有先生（東邦大学医療センター職員カウンセリングルーム）です。

私の「being」といえば、「運転」です。私は根っからの車好きで、あえてオートマではない車を乗り継いでいます（今は屋根が開く可愛い軽自動車です）。運転自体に手間が掛かるので、余計なことは考えずに過ごせます。楽しいことは勿論、それ以上に、ただ景色をみて、ただ音楽を聴いて、ただ時間が過ぎることは、その時間を「移動のみ」に使う贅沢を感じます。例えば、普段の私は、常に同時並行で何かをしています。「極楽とんぼ」と自覚するため、公共交通では資料を読みます。急け癖の払拭には、そうすべきだと焦るからです（でも…時々挫けます）。「アトピー性皮膚炎」持ちなでの、風呂は“リラックス”ではなく“治療の一環”です。治療を強く意識せざるをえない入浴はいつしか「一日の思考タイム」になりました（この文章の8割が入浴中の発想です）。だからこそ、純粋にそれのみに関われると、やり終えたときにはとても清々しく心地よい何かが残る気がします。余談ですが、純粋、という点では乳幼児が大好きです。見ているだけで幸せになれる理由は、きっと、彼らが純粋に生きているからだと、思っています。ちなみに、我が家の「純粋」は、私と一緒に写っているふたりの娘です。去年の夏から家族になった、やんちゃで甘えん坊で、なかなか手が掛かる「純粋」です。みずみずしい4つの瞳が、今日も私の帰宅を待っています。

## 編集後記



編集長に加藤先生が就任いたしました。加藤先生はバイタリティ溢れ、実行力抜群。教育相談の活動歴も長く、KJQには力強いスタッフです。このリサーチも新編集長のもと、さらに充実させていきたいと思います。

（事務局 菓地）

第3号は2014年1月発行予定です。